

八代焼(高田焼)

八代焼(やつしろやき)とは

加藤家時代の焼き物

今からやく400年ほど前、江戸時代のはじめの話です。そのころ、八代は肥後(ひご)54万石(ごく)の大名、加藤家(かとうけ)によって治められていました。八代の城と町は、加藤家の家老、加藤正方(まさかた)が、藩主(はんしゅ・殿様)にかわって守っていました。

当時、大名や有力な武士、町人たちの間では、茶道(さどう)*が、たいへん流行していました。加藤家の人々も、ずいぶん熱心に茶道を学んでいます。藩主の加藤家は、熊本城の近くに、八代の加藤家も八代に、茶道で使う茶わんなどを焼く窯(かま)をもって、作品を焼かせていたようです。

* 茶道 特別に作った茶室(ちゃしつ)で、茶わんや掛軸などを鑑賞しながら、茶の葉の粉に湯をそそいでかきまぜ、小さなあわをたてた抹茶(まっちゃ)を飲み、風流(ふうりゅう)なひと時を楽しむ。

細川家の肥後入国と新しい焼き物

加藤家は、初代清正(きよまさ)の子、忠広(ただひろ)の時代に、幕府によって取りつぶされてしまいます。寛永9年(1632)12月、かわって細川家(ほそかわけ)が肥後の大名に任命され、豊前小倉(ぶぜんこくら・福岡県北九州市)から、おおぜいの人々を引き連れて移ってきました。

当時の藩主は細川忠利(ほそかわただとし)で、熊本城主となりました。忠利には、隠居(いんきょ)した父親がいました。細川三斎(さんさい・隠居まえの名は忠興・ただおき)です。三斎は、勇かな武将であると同時に、若いころ、有名な千利休(せんのりきゅう・日本一の茶道の名人)に学んだことでも、よく知られています。妻のガラシャ夫人の悲劇は、みなさんもよくごぞんじでしょう。文武両道にすぐれた三斎は、熊本城の南の守りである八代城の城主となり、それから13年後に、八代で亡くなっ

ています。

細川家は、三斎も息子の忠利も、たいへん茶道に熱心でした。小倉にいたころ、細川家は、上野焼(あがのやき)の窯(福岡県田川郡赤池町)などで、茶道に使う道具を焼かせていました。上野焼の職人たちのなかには、希望して、細川家とともに肥後に移った人々がいました。これらの人たちにより、荒尾の小代焼(しょうだいやき)、八代焼などが、肥後で新たに焼きはじめられました。

細川三斎と八代焼

八代では、上野から来た喜蔵(きぞう)とその家族が、加藤家時代の職人や窯も使いながら、新しい焼き物をはじめたようです。最初の窯は、奈良木(ならぎ)にあり、喜蔵の死後、万治元年(まんじがねん・1658)に、南の平山(ひらやま)に移されたといえます。喜蔵は、日常の生活に用いる壺や皿といった器を焼くいっぽう、三斎の指導で特別にこしらえた茶わんなどの、すぐれた茶道の道具を残しています。

八代焼と高田焼

ところで、八代焼の窯があった奈良木も平山も、八代の高田(こうだ)という所の地名です。それで、八代焼は、江戸時代から高田焼(こうだやき)とも呼ばれました(明治時代から後には、高田焼の名の方が使われます)。八代焼と高田焼とは同じものことなのです。

以上みてきたように、八代焼(高田焼)は、加藤家時代をあわせると、やく400年ちかい歴史のある焼き物です。現在では、江戸時代から続く上野家(あがのけ)の窯のほか、八代市郡内に四つの窯が製作を続けて、肥後が誇る焼き物の伝統を守っています。

お知らせ

八代焼について、くわしい解説をご希望の方は、玄関受付で、「八代焼 伝統の技と美」展覧会図録をお求めください。